大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

被災者として阪神・淡路大震災の被災体験から学んだこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011314

レポート

被災者として阪神・淡路大震災の被災体験から学んだこと

藤　田　　正

はじめに

藤田(1996)は、阪神・淡路大震災の私的体験を整理した上で、被災地と非被災地の間の応報性が被災地の復旧・復興にとって重要であると主張した。いうまでもなく、応報性は全ての人の間で成立すべきものだが、大震災は否応なしに被災地域の人々を被援助者の立場に立たせた。そして、多くのボランティアが被災地に入ったが、その数に比すと非被災地に避難した被災者の数は少ない。つまり、双方向的な交流ではなく、非被災者（援助者）→被災者（被援助者）の一方向的な流れが成立し、被災地区はその回りとは異なる空間とされ、被災地のウチとソトには全く異なる雰囲気が生れ、そのウチ・ソトの境界は鋭いものとなった。そして、このことが被災地への観光客の激減、被災地外の被災者への対応不足などに結びついた。これらは震災後、被災地と非被災地の交流の様相が大きく変化したことの現れだが、阪神・淡路大震災の大部分の被災地は双方向的な交流を基盤として成立する現代都市である。故に、震災直後の救援において効果的であった非被災者（援助者）→被災者（被援助者）の一方向的な流れを都市本来の双方向的交流がなされる場へと変化させねば、都市被災地の復旧・復興はありえない。双方向的交流にとって必要なのは被災地と非被災地の間の応報性であり、それを実現するための人々の対等性である。大震災はこの応報性・対等性をつき崩したが、これらの復活なしに被災者の社会的自立は困難である。なぜなら、対等な応報性こそが自立の自覚を支えるからである。

さて、ここから被災者の自立に結びつく応報性・対等性の再構築が課題となるが、これは被災者だけの問題ではなく、非被災者の問題でもある。というの

は、被災者と非被災者の区別を成立させたのは間違いなく「震災」ということであり、被災者は非被災者を認めることによって被災者であり、非被災者は被災者を認めることによって非被災者だからである。こうして被災者も非被災者も「震災」をいかにとらえるかがポイントとなるが、被災者の多くの人は「もう震災は勘弁してくれ。他の場所でも起って欲しくない」と語る。この「震災」という言葉には、阪神・淡路大震災の被災地を越えた広がりがあり、「震災」について全ての人に考えて欲しいという願いが込められている。こんな思いの中で、多くの人が震災復旧・復興に取り組んでいるのだが、ここで問題となるのは、ウチ・ソトを区別した境界（壁）をどのような性質のものにするかである。もし、この壁を越えれない、もしくは越えたくない壁とするなら、応報性を生む双方向的相互交流は生じない。が、藤田(1996)はこの壁を八木(1988)のいうフロントと理解した上で、相互に援助しあう性質を持ったものとして創造すべきと主張する。援助という場合、非被災地から被災地への援助はボランティア活動、義援物資、義援金など分りやすい形で表現できる。が、反対に被災地から非被災地に対してなしうる援助、貢献とは何なのだろうか。物資、金銭を非被災地に環流できる余裕は現在の被災地にはない。我々被災者が提供しうる最大のことは大震災の中で得た被災に関わる教訓である。つまり、「知恵は返せる」のであり、震災教訓の発信は将来に向けての防災という目標に向けて、現在出来る援助行動の一つなのである。そして、このような応報的援助の過程が成立することによって阪神・淡路大震災の被災者は始めて自立の道を歩むことが出来るのである。

かかる思いの中で震災体験を語り、教訓として表現する試みが数多くなされているが、被災者が被災体験を情緒的次元でのみ語ると「結局、被災していない者には分らない」という言葉が示す壁にぶつかる。この壁の性質は相互援助的ではなく、被災者と非被災者を孤立的に、時には相互排他的にさせ、被災者をして、「分ってくれない」と思わせ、語ることを断念させる。だが、それでは応報性は成立しない。故に、地震もまた自然の一つの営みであり、全ての人がそのような自然の中で生活していることを自覚した上で被災体験を語らねば

ならないのだが、被災していない人々に分る、役立つ形で表現をすることが必要である。というのは、そうでなければ交流は一時的、一方的なものに終わってしまうからである。その試みとして私は情緒的側面について、その変化過程を整理した（藤田・1996）が、全ての被災者の情緒・感情を表現しきれたとはいえない。というのは、PTSDが示唆するがごとく被災は今もなお確実に継続しており、個々の被災者が感じる情緒の種類、強弱、発現時期は異なっているからである。情緒・感情にどのような共通性があるかについては今後とも十分に検討しなければならないが、その際に忘れてはならないのは、ここで示される個々人の差異であり、例えば「こころのケア」という場合、その差異そのものをそのまま受容することの重要さである。ここで言っているのは被相談者が被災者の全ての情緒・感情を被災者そのままに理解することではない。むしろ、異質な経験を、その異質性そのものがその人を成立させていることをそのまま受容することである。というのは、そうでなければ異なる存在としての相談者と被災者は成立せず、それを基盤とした応報的相互援助は起きないからである。が、このように経験の異質性を強調した場合、おうおうにして「私には関係がない」という反応が返ってくる。けれども、被災者と非被災者の間の異質性を生出したのは「震災」という共通の出来事なのである。このことの理解なしに「関係がない」と相互にいいあった場合、それぞれの人は相互孤立的になってしまい、永遠に相互が交流しあうことは起きない。では、果たして「他者とは全く関係がない」と言切った形で、被災者は生きることが出来るだろうか。確かに「被災は被災者によって全て異なる」と言われるように、被災者同士が話合った時、驚くほどに異なっている。が、被災者はこの異質性をそのままに受け入れつつ、二次的な震災を起こさないようにしようとする協力と努力の中で被災生活をしている。つまり、「防災」が人々の共通の課題となり、そこには相互に援助しあう関係が成立している。ここで重要なことは震災によってもたらされた「被災」が「防災」という言葉に置き直されていることである。

いってみれば、この置き直しの過程が復旧・復興の過程なのだが、その実現は容易ではない。なぜなら、ある地域の力で解決できるほど小さな震災ではな

いからである。そして、このことは今回の大震災の被災者は阪神・淡路の地域の人々だけではなく、それを取巻く地域の人々もまた阪神・淡路とは異なった意味で被災しているということを示唆する。「ボランティアためらい症候群、藤田・1996」と私が名付けた学生の存在は、今回の大震災によって、もっと広い地域の人々が被災したことを如実に示すが、このような視点に立って始めて「震災」、「被災」、「防災」ということについて相互に語り合い、相互に援助しあうことが可能となると私は考えたい。そこでまず、先に述べたように情緒的側面についての被災感情には大きな差異があるのだが、それを受容しあった上で、「防災」という課題を実現するための認知的側面について交流することを提案したい。というのは、防災」に関わる認知的側面は、位相を区別することが可能（藤田・1996）であり、その位相ごとに発想され、提起されたアィデア・知恵は具体的行動が可能な提案であるが故に、全ての人にとって十分に理解可能なものであり、共有することが可能だからである。私は、それを少々ロマンチックに「夢の共有化」と表現したが、藤田(1966)をまとめた時点においては、その道が遠いことを実感していたが故に「夢」と表現したのである。が、その時点からみると、阪神・淡路大地震以降も世界各地で地震などの災害が発生しており、「夢」として遠くにおくことが出来ない事態も生れている。そこで、本レポートでは、今までに私自身が発想したり収集したそのような数多くの具体的提案をまとめた。が、これらの提案は今回の震災を契機としているが故に、被災地の復旧・復興に関しての提案に必然的に繋がっており、神戸市震災復興懇話会委員として「神戸の復興についての私の提案」として提出したものに若干の加筆をしたものである。そして、この時点で行わねばならないと考えたのは、震災を契機として生れた、いかに創造的なアィデアであっても、時間が経、日常生活の再建が進むにつれて、そのアィデアの新鮮さが薄れ、当り前のものになっていくからである。「震災を風化させるな」と盛んに言われるが、私自身正直にいえば「震災を出来ることなら忘れたい」し、春風のようにさわやかに「風化できるものならそうしたい」のである。つまり、アィデアは日常生活の中に埋もれてしまう危険性を常に持っているのである。このような

意味で、まだアィデアが新鮮さを保っている時点で書留めたいと思ったのだが、このような気持ちを喚起させた最初の契機は、震災後参加した震災研究のプロジェクトであり、そこでの関東大震災での教訓が活かされていないという指摘であった。そして、昭和13年の、全市の59％を濁水が覆った神戸大水害を知ったことが、この思いを強めた。神戸区水害復興誌（昭和14年）の前書きに「泥水と濁水の中に逸早く手を伸ばされた近府県勤労奉仕団体六十万人の救援は、銃後の美しい国民性の再発見であった」とある。この文章から「銃後の」という言葉を抜き、「泥水と濁水」を「地震災害」に、近府県勤労奉仕団体六十万人」を「ボランティア百五十万人」に変えると、大震災後盛んに強調されたことと全く同じである。果たして、これで良いのだろうか。自然災害に対しての人間の行動には大きな差異は生じないとしても、「銃後の」の言葉が入るか入らないかについては、ここでいう国民性の位置づけが全く異なってくる。「銃後の」と規定された上での救援をボランティアの方々は行ったわけではない。ボランティア元年と称されるゆえんは、このような「銃後の」規定なしに自発的な救援が起こったことにある。我々被災者がボランティアの人々に感動し、感謝し、自らの自立を夢みる力を促進させたのは、そのボランティア自身の自立性に輝きがあったことに、その一因があった。つまり、新たな市民社会を目指す過程での一つの社会的モデルとして我々に働きかけたのである。阪神・淡路大震災の被災者たる我々は生活再建という現実に直面し、相互援助の必要性を如実に感じているが、それは決して「銃後の」で表現される社会を目指してではない。この意味で、本レポートの性質は数多く出会った人々、ボランティアの方々への私自身の現状報告、メッセージである。

本レポートでは、まず被災地・神戸の基本イメージについて、「発酵のまち」「TRYのまち」ととらえたことについて述べ、それを踏まえた上での具体的な企画を提起するが、この方法は私自身がいくつかの組織体で経験した組織開発、小集団活動における活動記録と同じである。つまり、事例研究的であり、ここから生じる限界がある点については留意しておいて戴きたい。が、かかる個別的・具体的提案とそれを包含しうる枠組みの検証なしには「防災」という

夢は実現しえない、と私自身は考えていることを付言しておく。

神戸復興についての提案

1）「発酵のまち」…神戸の基本イメージ

神戸の基本イメージを「発酵」ととらえる。その理由は、1）東部地域における「発酵」をもとにした酒醸造があり、2）外国人が多く居住し、独特の雰囲気を「発酵」させていることにある。さらに、海神と山神が接して（須磨の海と六甲山)、「神のイエ」を意味する神戸というマチを形成しているともとらえうる。つまり、異質なモノ・コトが混在しつつ、「発酵」し、新しいものが作りだされるというイメージが神戸にはある。かかるおおざっぱとはいえ、基本イメージを設定することが、様々な提案の相互関連性を整理しやすくするが、ここでいう「発酵」イメージは大震災後の神戸に対してある種の期待を生む。大震災という非日常性と現代都市という日常性を「発酵」させて新たな防災文化をもつマチを作るのではないかという期待である。いうまでもなく、この期待の裏にあるのは「現代都市」への疑念である。例えば、現代では日本中どこにいってもミニ東京だらけだが、それが今、都市の魅力となり得ているのか、という疑問である。なぜならそれは模倣に過ぎず「ほんものさ」を実感させないからである。「自分探し」「グルメ志向」などなど現代人が求めているのは「ほんもの」である。が、それを自給自足のムラではなく異質の人が交わるマチに求めることから現代都市の魅力づくりにおける難題が生じる。なぜなら、伝統的な米づくりを中心とする定着性を軸とするムラ観念からの脱皮が必要で、それはいわゆる伝統的日本人論の見直しを迫るからである。この見直しの一つの視点は「田から海へ」への転換にある。そして、神戸が持つ基本イメージは間違いなく「海のまち」である。そこで「海はウミであり、ウミは生み」であると考える。いうまでもなく、この「生み」は「田の生み」ではなく、「交わりの場としての海の生み」である。これが神戸が基本的に持つ開放性イメージに繋がる。つまり、「海の民」すなわち「交流の民」が住いする場が神戸とい

うイメージである。田中内閣の列島改造論は陸路を中心とした、一点集中的な東京志向性を如実に持つが、神戸が提起すべきは海路を中心とした、開放・拡大的な志向性を持つマチである。かかる基本的視点を設定したうえで「発酵」ということを考えてみる。　さて、「発酵」という言葉は、A）異質性、B）有機性、C）交流、D）匂い、といったことを連想させる。そこでそれに従って展開する。

A）異質性…「発酵」は異質なものの有機的結合から生じる。

＊異質性の重視と統合

異質性を突詰めた形で、ヒトにあてはめると、それは個性である。アンドレ・ジイドは「私がフランス人であることは間違いないが、いかなるフランス人であるかは私の自由である」と言った。この個性重視の視点を基本的に重視すべきである。が、個々の異質性をそのままに放置すれば、それは単なる混沌である。人権宣言は「人は本来、自由・平等であり（存在）、博愛の精神を持たなければならない（規範）」とする。これは存在論的には自由・平等な個々人が、博愛という規範を重視することによって統合されることを示すが、留意すべきことは博愛を含む規範は人々が作り出すもの、ということである。ここから個々人の参加が不可欠な条件となり、いかなる参加が必要なのかが問題となり、震災後の「まちづくり協議会」の在り方に関する議論はこのことに関わっている。

B）有機性…「発酵」は異質なものの有機的結合の過程である。

有機的結合過程が起る場でコミュニケーションがなされる。コミュニケーションの類義語にはコミュニティ、コミューン、コモンなどがあり、それらが示唆する如く伝達の意味の他に、共通性の象徴たる「同じ聖杯を拝領する」の意味がある。ここからいかなる象徴を作り出し、共有するのかが重要となる。どのような「まち」にするのか、という議論はこのことに関わる。

＊期待される有機的過程

さて「発酵」は有機的過程であり、人の場合、この過程がコミュニケーションだが、個々人の異質性を出発点とするが故に、多様な方向が生み出さ

れる可能性がある。それ故に、いかなる方向が可能性を持つかについて様々なケースを検討し明らかにしておくことが肝腎となる。防災の場合の、地域・時刻を特定しての災害想定を行うシミュレーション研究がその典型だが、地域・時刻を特定するが故に、それは事例研究的側面を如実に持つ。そして、それらの結果は公開されねばならない。なぜなら、そのことによって始めていかなる共通性のある象徴を個々人が選択するかが可能となるからである。

ところで、兵庫県南部大地震によって、阪神・淡路地域に住む市民の多くが被災し、被災者と称された。この言葉・社会的ラベルによって多くの人が言語的にはひとまとめにされたが、この用法に従うなら被災者が市民に戻る過程こそが一人ひとりの復興過程ということになる。藤田(1966)は、震災復興において、市民→＜地震＞→被災者→＜避難＞→避難者→＜暮し＞→個人→＜参加＞→新しい市民という長い位相があると主張する。ここで＜　＞で示すのは、社会的ラベルの変化を導く媒介もしくはノウハウだが、そうであるが故に、そのことについての十分な検討が必要である。例えば、具体的には活断層、避難所、義援物資、マチづくり協議会などの在り方についてであり、それがなければ、被災した市民を新たな市民とすることは出来ない。この位相の検討は、特定の地域・時刻を設定しての研究が横断的であるとするなら、縦断的なものであるが、被災者、避難者といった用語の使用そのものに反対しているのではない。というのは、まさにこれらの用語が、その言葉を冠された人々が震災によって非日常的生活を送っていることを示すからであり、そのことを明確に意識することによって始めて、いわゆる危機管理の在り方が問いうるからである。例えば、仮設住宅の意味が避難所なのか個人生活を再建する場なのかは不鮮明なままである。横断的研究と縦断的研究の統合を私は望むのだが、その際に必要なことは個々の異質性を重視しつつ、その異質性を生出しかつ結付けているものを見詰めることである。今回の例でいえば震災ということである。なぜなら、それが被災者と非被災者を繋ぐ架け橋の根拠だからである。そして、その架け橋のありようが変化するのであり、言葉を変えればそこでの関係性こそが個の原因となるからこそ重要なのであ

る。

C）交流…交流は有機的反応を起す行動の具体的表現である。

被災者の交流相手には同様の被災を受けたウチの人と非被災地のソトの人々がいる。が、ウチの人とのみの交流では神戸は復興しない。何故なら、神戸は自給自足を原則とするムラではなく、ソトの人々との交流によって作りあげられるマチだからである。マチ・市（イチ）はムラ・ムラ間の非日常的空間として成立した。が、現代の日本社会においては、ほぼ全ての地域がマチを志向しておりムラは消滅しつつある。そして、全ての地域が同様な特徴を持つ地域となり、地域の魅力をどう設定するかが難しくなっている。換言すれば、おのおののムラが日常的にそれぞれの特徴、個性を持っていた時代ではマチの持つ非日常性がそれ自身、ムラの制約からの解放という魅力となり得た。が、現代日本社会ではこの魅力性は低い。さらに解放性を求めて旅行先として選択される場所の多くがムラ的雰囲気を持つことが示唆するようにムラの魅力が現代日本では再認識され始めているとさえいえる。これはムラ的雰囲気をマチの魅力とする新たな発想を示唆する。「下町」がその例だが、神戸を訪れた多くのボランティアが「そこには温かい交流があった」といい、「神戸元気村」のようにムラであることを鮮明に打ち出して活動した団体もある。このような例が示すようにムラとマチの双方の特性を持つ都市の魅力を作りだすことは不可能ではない。大切なことは、このことが現在復興において課題となっているコミュニティづくりに関係しているということである。

＊交流の場（フロント）

それぞれのコミュニティはある境界（壁）によってウチとソトの領域が区分される。が、八木はウチとソトのアイダに位置するその壁はウチ・ソトの両者に属するフロント構造を持つとする。この指摘は重要である。なぜなら我々が建物を作る時、実際に資財を使用して作り得るのは壁であり、空間はその結果できるものだからである。とすると我々の行動の対象は建物における壁のようなアイダということになる。そして「現在に生きる我々」は全て

過去と未来のアイダにいるのだから、我々が働きかける対象は「現在に生きる我々自身だ」という当り前のことになる。が、明らかに震災後、我々被災者の心の中に被災地をウチ、非被災地をソトとする発想が生れ、ウチとソトの交流を妨げる壁が生じ、この壁を取り除くことが議論された。が、実はどのような性質を持つ壁を作るかが問題なのである。つまり、交流を妨げる壁なのか、交流を促進する壁を作るのかなのである。この問題は今、世界が悩むエスノセントリズムの問題に通じるが故に簡単に答がでるわけではないが、神戸がどのような新たな壁を作りだそうとしているのかについて注目が集まっていることは意識しておくべきである。さて、いかなる種類の壁であれ、それはウチの人だけ、もしくはソトの人だけでは作りえない。ウチ・ソトの両者があって始めてできる。が、ここで留意しなければならない点はウチ・ソトは壁が作られた結果でもあるということである。つまり、ウチ・ソトが先にあって壁が作られたのではなく、壁が作られることによってウチ・ソトが区別されるということである。では、震災後なぜウチ・ソトの交流を妨げた壁感覚が生じたのか。このことを理解するには時間軸が必要である。つまり、震災以前に作られていた過去の壁が震災時においてもそのまま機能したために交流を促進することを妨げるという結果を導いた。新たな交流促進を目的とする壁が規範として即座に提起されなかったことが問題なのである。とすると、地震後の現在時点において必要なことは新たなウチ・ソトを交流を目的とする規範を作ることによって成立させるということになる。例えば、救命救急においては従来の府県市町村の単位を越えようという試みがなされている。

＊被災経験の交流

いうまでもなく震災がウチ・ソトを分けた。故にウチ・ソトの人それぞれの被災経験を交流するということが新たな交流のための最も重要な素材だが、被災経験の交流の実現はどうすればよいのだろうか。いうまでもなく最も効果的なのは震災を共通体験することである。この意味で「震災・防災センター」を設置し、同種の体験を非被災者に経験して貰うことは極めて意義深

い。が、ここでは体験が交流財となるために、体験するコトが可能な人数は制限され、時には、その存在すら知られなかったりする。ここから言葉・映像という交流財による「防災広報」の重要性が浮かびあがりマスコミの協力が不可欠となる。が、マスコミの持つ一過性という特徴を無視することは出来ない。つまり、全てをマスコミに期待することは出来ない。さらに、震災に対して我々は身構え続けることは出来ない。注意は常に低下し続けるからである。注意再喚起の手段が必要となる。この意味で「震災の日」「メモリアルディ」は有効であるが継続的手段とはいいがたい。ここから出来るだけ広くかつ継続的に啓発しうる手段にも注目すべきということが浮かびあがる。交流はヒト・言葉だけでなくモノによっても起こる。モノも全世界に広がる力を持っており、そのモノが使用される限り継続的に伝わり続ける。ここから被災経験をモノに託するという手段が発想される。例えば、震災経験を活かした「神戸発の防災グッズ」である。ここから新しい商品・産業が生れる可能性もある。さらに「メード・イン・神戸」の商品は継続的に流通している。ここから「メード・イン・神戸」の商品に被災経験を託するという発想が生れる。例えば、「ポタポタ焼き」という商品があるが、その袋には「おばあちゃんの知恵袋」のタイトルで小さいが気のつき難いアィデアが印刷されており、結構人気がある。この方法を真似て「防災に関わる生活の知恵」を書いたリーフを神戸商品に付けるといった方法が考えられるし、商品由来書に震災経験を書込むといったことも考えられる。風化させないというのは、かかる継続的交流手段に思いを付託することによってしか実現できないのだが、このような企画を実現するというコトが必要なのである。いわばモノづくり」だけではない「コトづくり」が必要なのである。

D）匂い…匂いとはマチの雰囲気であるが、「発酵」の過程および結果には匂いがあり、この匂いがマチの魅力となるが、神戸の匂いは異国情緒の言葉で示されてきた。

では、異国とは何か。明治時代であれば西洋の諸外国が異国であった。が、西洋人の多さを現在の神戸の特徴として主張することは出来ない。なぜなら

東京・大阪などには極めて多くの西洋人が住んでいるからである。とすると、現在の異国とはそれこそ東西南北の世界中の人々が住んでいるマチで、そこで醸しだされる雰囲気が異国情緒ということになる。この意味でいえば、確かに神戸にはジャズ発祥の地、神戸祭りのサンバ、中華街、おいしいキムチ、北野異人館など比較的多様な文化が混在するマチというイメージがある。が、長崎のオランダ村、伊勢のスペイン村など相当に強烈な異国性を強調する場所が神戸以外に多数出現しており、神戸の異国性が持つ魅力は相対的に低下している。ここから考え得る方向性は二つあり、その一つは強烈な現代的異国性を表現する外国の雰囲気を持つ文化を新たに導入することであり、もう一つは日本的文化との対比を神戸において際立たせるということである。

＊伝統主義

さて、ここまでは異国性情緒を外国文化という視点で考えてきたのだが、実は神戸は日本が大きく変化する際のパイロット的役割を担ってきた地域である。日本の社会体制の変化にはいくつかの変化ポイントがあるが、平安時代の貴族社会から鎌倉時代の武士社会への変化を促したのは平清盛であり、彼は港町神戸・福原遷都を行った。また、江戸時代から明治時代への変化においては神戸に最初の操船訓練所が出来る。この二つの変化ポイントは間違いなく日本歴史の最も重要なターニングポイントだが、海を媒介とした外国との交流という共通項を持つ。この意味で「海」は神戸の伝統的文化なのである。伝統主義には「以前のままを引継ぐ」という意味と「改変を示す裏切り」の意味の二つがあるが、神戸の歴史は後者の意味をも顕著に併せ持つ。つまり、平清盛の福原遷都は失敗し、明治以降、日本海軍の大きな基地が神戸に出来たわけでもない。これが「神戸はTRYのマチ」という伝統を示唆する。このTRYについては後で述べるが、現在の神戸がTRYすべきテーマは間違いなく震災復興である。

＊TRYすべきもう一つの異国性

国というレベルで異国を考えれば外国ということになるのだが、神戸はマチの震災というもう一つの異国性を経験した。震災を異国というのは異国が

非日常性の意味を含むからである。こう考えると、実は震災の復興そのものが新たな異国情緒を作りだす可能性を秘めていると理解出来る。そして、この復興に出来るだけ多くの外国の参加を求めることが、外国と震災という異なるレベルの異国性を統合することになる。このことの現代的意味は21世紀の課題たるエスノセントリズムの克服という問題に繋がる。つまり、個々の自立性を保持しつつ協力しあう関係をいかに作るかであり、これは共生の問題である。この意味で神戸の活動は世界中の注目を集める可能性が非常に高いのだが、その基本的構図は、震災などの自然に対していかなる共通の構えを人々が作り得るかにあり、そのための多くのTRYがなされなければならないと考える。

2）「TRYのまち」

神戸は「TRYのまち」である。そして地元神戸製鋼のラグビー・チームがまず求めるのもTRYである。TRYには「試みる」「努力する」「効力を試す」「試練に立ち向かう」「正否を決する」などの意味があり、リーダーシップに代表的だが人間の行動はTRY・SUCCESS・EFFECTに分離される過程を持つ（バス 1961）。そして、この三つは図1のような（企業化）のトライアングルをなすと考えられる。

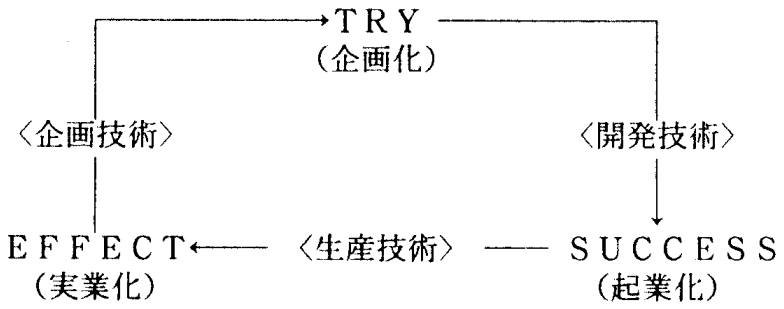


図1．（企業化）のトライアングル

ここでTRY. SUCCESS. EFFECTのそれぞれを（企画化）（起業化）（実業化）とし、このトライアングルを回すことを考えれば、TRYとSUCCESS

の間には＜開発技術＞、SUCCESSとEFFECTの間には＜生産技術＞、そしてEFFECTとTRYの間には＜企画技術＞が必要となる。現在、起業ということが盛んにいわれる。これは被災地でも同様であるが、いってみれば被災地では実業部分の機能が低下し、その復活が望まれているのだが、そのためにはまず企画化が必要である。なぜなら企画なしの起業はありえないからである。が、従来は明らかに＜開発技術＞を優先し、それに＜生産技術＞を追随させる構造でモノづくりが行われ、＜企画技術＞にはあまり目が向けられなかった。そこで働く人々は同質の、一列横並びの存在ととらえられた。が、個性重視の現代において、これからの神戸が目指すべき一つの方向はコトづくりであり、そのための企画化が注目されねばならない。さて、個性重視とは一列横並びではない個々の異質性を認めることだが、それをとことん突きつめれば個々の人々はそれぞれが中心となる、相互に「外に位置しあうコト」が起きるex - stateな状態となる。この状態は「恍惚」でもあるが同時に「孤独」でもある。個性を求める現代人が孤独といわれる所以である。ところで人は孤独な時、他者を求める。この時、二つの方向がある。その一つは他者の本性に自分と同じ同質性を求めて安心しようとする方向である。が、この同質性を神秘主義的に求めるならいざ知らず、ヒトの属性に求めるなら個性的ヒトが求めるのはあくまで異質性だからこの同質性を求める試みは失敗する。そこで我々は「夢」を作り、それを異質な人々の間で共有化しようとする第二の方向を選択する。「青い鳥」の主人公たちは幸せを遠くまで探しにいった。そして最終的にはそれを身近に見出だした。この話の教訓は「幸せは探すのでなく造る」にある。なぜなら身近な関係とは常に造りだされているものだからである。この「夢の共有化」作業を行うにコミュニケーションが必要であり、そこでまずなされるのがTRYである。なぜならTRYとは現実生活におけるニーズ充足の必要性（九鬼周造の言葉を借りれば、欠如性の自覚）から生じた最初の「夢実現への志向」だからである。「必要が発明の母」と言われるが、間違いなく、被災者は現実の被災生活において様々にニーズを感じ、その具体的解決策を色々と考えだした創造性あふれる被災生活の経験を持っている。換言すれば、創造的な「生活

の見直し」を行ったわけで、そこでの知恵、例えば近隣協力の形成方法は現代日本社会が持つ問題に対する大きな解決のヒントを秘めているといってよい。それらの経験を共有化された夢にまずするのが「コトづくり」であり、そのための＜企画技術＞の充実が必要である。

＊コトづくり

TRYがまず目指すのは「モノづくり」ではなく「コトづくり」である。イベントづくりが「コトづくり」の典型であり、「祭り」がイベントの代表であるが、「祭り」には常にヒトビトの夢・願い・祈りが内在している。つまり、そこには「夢の共有化」の分り易い形がある。さて、EVENTの「E-」が示すのもエクスタシィ同様「外に」の意味だから、イベントづくりとは「ウチなる日常と異なるソトの非日常を作り出すコト」である。ここにはウチ・ソトの区分があるが、自給自足の不可能な神戸のような交流を基本に成立するマチの場合、ウチとソトの両者が交流できる形でのイベントづくりが不可欠である。震災後の、神戸祭、ルミナリエなどのイベントはソトからの動員には一定程度成功しているが、少し詳細にみると、これらのイベントによって経済的に潤っているのは一部であり、神戸全体のイベントとはなり得ていない。つまり、神戸全体の夢が表現されたものとするには、もう一段の工夫が必要で、例えば、昭和39年以来、中断されている「駒ケ林の左義長」などの地域の祭を復活し、同時開催することが望まれる。だが、いうまでもなく、最も重要なのは日々「マチで生活するというコト」である。大震災によって「マチで生活するというコト」に間違いなく神戸市民は最も苦しみ、最も悩んだのである。そこで行われたコトは、以前のマチ生活ノウハウに変えて被災生活に最も合うノウハウを創造的に作りだすコトにTRYするコトであった。日々の小さなアィデアというかも知れないが、そこには世界に通用する防災という夢が内在しており、TRYの意味する「試みるコト」「努力するコト」「効力を試すコト」「試練に立ち向かうコト」「正否を決するコト」が様々になされたのである。

なぜこのことを強調するのかと言えば、現在の神戸にとって最も必要な

「交流」は「モノだけでなくコト」を通しても行っていく必要があるからである。そして、神戸は「商い」という場において鈴木商店、生協、ダイエーなど、新たな「商い」の展開の仕方（コト）を提起してきた歴史を持つからである。これらは生活への新しい提案をするコトによって成立した企業だが、現時点では、防災ということを考慮した新しい生活の提案（コト）を行うことが「交流するコト」において最も重要である。例えば、提案されている公的支援、震災保険である。これらは「防災という夢の共有化」にとって極めて重要である。そして、次に必要なのは、どこが経営主体となり、どう運営するかなどの具体的な起業化の提案である。つまり、TRYで始まるコトづくりは連鎖的に繋がる。また、「神戸に友人を連れてくる」「イベントで観光客を呼ぶ」なども間違いなく「交流するコト」であるが、それだけでは双方向的交流にはならない。神戸から防災を表現し提供しうるコンテントが非被災地に向けて発信されなければならない。なぜなら現時点で、非被災地の人々に最も役立つのは「神戸発の防災の知恵」だからである。例えば、「震災保険」「防災センターで震災を学ぶ」「メード・イン・神戸のモノに防災の知恵を託す」「ボランティアの育成をする」「危機管理システムの提案」「危機管理マネージャーの養成」などなどのコトであり、極めて多くのコトが提案されている。これらは全てウチとソトを防災という全ての人の願いを「神戸」で交流させあうコトのTRYである。この意味で、神戸は極めて多くの起業化のネタを持っている。

＊「神戸・場づくり」

コトは人々の関係において実現する。そして、関係が成立するのは場においてである。この意味で神戸という場において、防災という全ての人の願いを目指してウチとソトの人が交流する。つまり、コミュニケーションする、そうした「場づくり」をすることが今肝腎である。さて、コミュニケーションとはコミュニティ、コミューンなどの類語だが、伝達の他に聖体拝領の意味があり、これは価値共有化の意味を示唆する。また通常、地域をコミュニティというが、原義においては「互いに奉仕する状態」をいい、共有、一般

的、ありふれた、普通などのコモンに通じる意味を持つ。つまり、コミュニケーションとはごく普通の人々が共有化する価値の実現を目指す行動をするコトであり、そして、その行動をお互いに支えあっている場がコミュニティである。

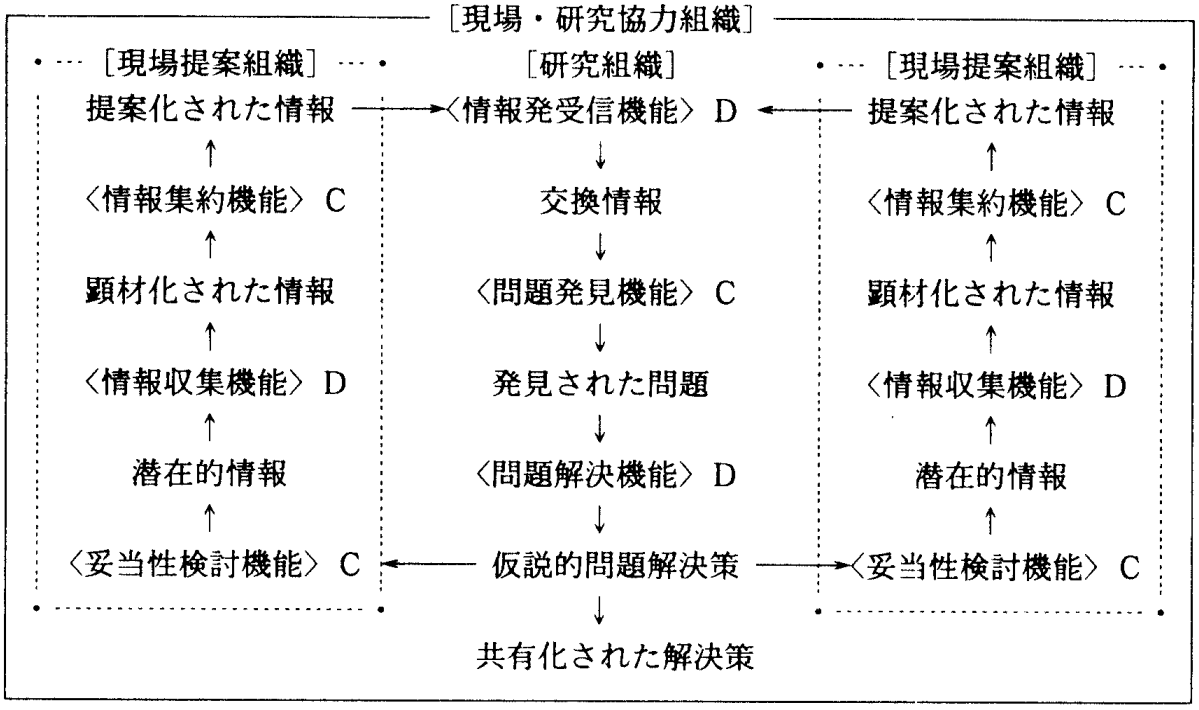
このような場を支えるコミュニケーション手段は言語・映像伝達には限られず、金銭、物資、交通なども重要なコミュニケーション手段である。神戸には神戸が行う「防災」という世界中の人々が持つ共通の価値を実現するのTRYを様々なコミュニケーション手段によって発信することが期待されているのだが、このためには、神戸がソトに向けて提供できるコンテントがなければならない。もし、それがなければ、そこに出来上がるのは援助者→被援助者といった一方向的な関係か、もしくは相互に孤立した関係であり、それは自立しつつ交流する関係ではない。そこで神戸がソトに向けて発信する「コンテント提供のTRY」を出発点にして考えてみよう。TRYの原義は「ふるいわけるコト」である。すると、「ふるいわけるための、多くの防災に関わるコンテント、潜在的情報が掘り起され、集められなければならない」ことになる。つまり、＜情報収集機能＞が必要である。が、情報収集が行われただけでは「ふるいわけるコト」は出来ない。それを一定の基準（防災）に従って整理集約し、提案としてまとめられなければならない。このための＜情報集約機能＞が必要である。さて、ここまでの過程は、潜在的情報→＜情報収集機能＞→顕材化された情報→＜情報集約機能＞→提案化された情報、と表現できる。ここには、＜情報収集機能＞、＜情報集約機能＞の二つのノウハウがあるが、＜情報収集機能＞が拡大性を志向するのに対し、＜情報集約機能＞は集約性を志向する。つまり、求められる思考論理が異なるのだが、かかる異なる思考論理を統合するのが企画化・マネジメントであり、それを行う場が組織である。この組織を提案組織と呼ぶことにするが、現場からの情報をベースとしたものだから［現場提案組織］とする。

さて、情報集約が行われ、提案としてまとめられただけでは「交流」は実現できない。集約された結論をソトに向かって発信しなければならない。このた

めの＜情報発信機能＞が必要である。が、情報が発信されるだけでは「交流」は実現しない。当然＜情報受信機能＞が必要である。そうして始めて情報は交換される。では、情報が発信され、受信されれば「交流」は実現するだろうか。我々が「交流」を通して望むことは、震災に限っていえば、すべての地域の防災レベルが高まることである。そのためには、各々の地域の従前のレベルの持つ問題点を理解することが必要である。ここで必要なのは＜問題発見機能＞である。そして、発見された問題は解決されねばならない。＜問題解決機能＞が必要である。次に、問題解決策の適用範囲が検討されねばならない。というのはそこで見出だされた解決策は仮説的であり、多くの地域に適用するにはその妥当性が検討されねばならない。このための＜妥当性検討機能＞が必要だが、これは現場との協力なしには不可能である。このことを通して始めて複数現場における問題解決策の「共有化」が実現できる。さて、ここでは、＜情報発受信機能＞、＜問題発見機能＞、＜問題解決機能＞、＜妥当性検討機能＞をあげたが、拡大性を志向する＜情報発受信機能＞、＜問題解決機能＞と、集約性を志向する＜問題発見機能＞、＜妥当性検討機能＞に分類できる。つまり、異質な思考論理があるが故に、ここでも企画・マネジメント・組織が必要だが、この流れはいわゆる研究の流れであるから［研究組織］とする。

さて、［現場提案組織］と［研究組織］の二つをあげたのだが、この両者は「実践的」な、＜妥当性検討機能＞を通して結びつかねばならない。なぜなら、「実践なし」にその場が変化することはありえないからであり、さらにはそこから新たな情報が生れてくるからである。つまり、［現場提案組織］と［研究組織］を統合する目的を持つ、アクション・リサーチを可能とする［現場・研究協力組織］が全体として必要である。この組織の全体図を図2に示すが、矢印のごとくに連結しあうが、Dで示す拡大的思考、Cで示す集約的思考が交互に現れ、サイクルを形成しながら最終的な「共有化された問題解決策」に結びつく。つまり、この［現場・研究協力組織］にもまた異質な思考論理を統合する企画・マネジメントが必要なのである。

神戸が担うべきは、例えばこのような三つの組織を運営するシステムを作り作動させていくことである。そのためにはそれを担いうる人材を育成していく必要がある。が、ここで留意しておくべきことは、ここであげた全ての機能は被災者全ての人が多かれ少なかれ震災時に発揮したコトだということである。それゆえに、これを担うことが可能な潜在的人材は非常に多いということである。



注）D…拡大的思考、C…集約的思考

図２．［現場・研究協力組織］の分担領域と過程

＊ヒトづくり…日本的特徴

図２で［現場・研究協力組織］の重要性を指摘した。神戸が担うべきは、このような［現場・研究協力組織］を作動させるシステムを作っていくことである。そのための人材を育成する必要があるが、ここであげたすべての機能は被災者すべての人が多かれ少なかれ震災時に発揮したということである。つまり、これを担うことが可能な潜在的人材は非常に多いのである。が、実はここには「伝統的日本型組織を見直すTRY」が含まれている。中根千枝

（1967）は伝統的日本型組織の特徴を、「底辺のない三角形」と指摘する。これを積み重ねればタテ社会的な伝統的日本型ピラミッド組織が出来る。この組織はトップの力量範囲内においてのみ有効性を持つ。が、阪神・淡路大震災の教訓は神戸市民の発揮したヨコ関係の重要さであった。つまり、「三角形の底辺を造るTRY」であった。［現場・研究協力組織］はこのヨコ関係、もしくはコミュニケーション・ネットワークを特徴とする組織である。networkとはシステム構成単位が相互に密接に関連した組織のことだが、netには「網」の他に、ビジネスで使う「正味の、掛値なしの」の意味がある。つまり、「掛値なしの」コミュニケーション・ネットワークを造らなければnet profit（純益）は生れない。が、これが意外に難しい。というのはここに伝統的日本型組織の特徴が影響するからである。有賀喜左衛門（1967）は伝統的日本型組織を構成する人々は、自らの属性を「オオヤケとワタクシ」に二分し、そのタテ系列化が滅私奉公的ピラミッド組織を構成すると主張する（図３）。

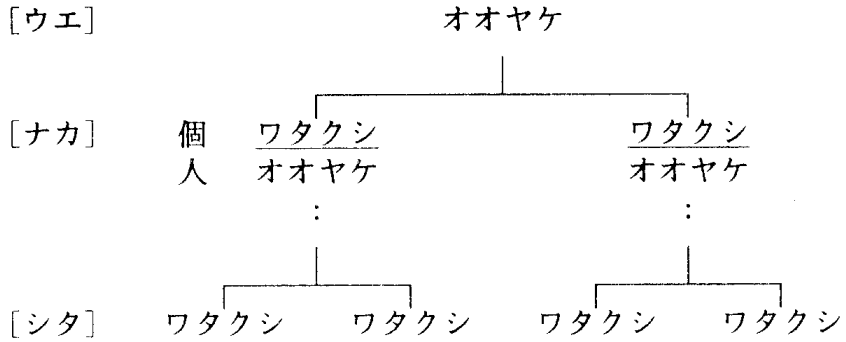


図３．有賀喜左衛門の考え

図３は、有賀の考えを示したものであるが、彼が主張する日本人の特徴は［ナカ］の人々について顕著である。滅私奉公は「オオヤケとワタクシの間に共変的な逆比例関係がある」構造だが、ここでは個人領域はオオヤケとワタクシに二分される。そして、その両者間に共変的逆比例関係を置くのが滅私奉公だが、オオヤケの代わりにホトケを置けばワタクシを滅することによる成仏発

想が成立する。が、ここで注意すべきは有賀のモデルの一番上にはオオヤケ（成仏の場合はホトケ）があることである。もし、オオヤケの代わりにワタクシを置けば日本社会でおうおうに見られる利己主義的なワンマン体制が出きあがる。ここからトップに、強いオオヤケさ、もしくは無私の精神を求めることが起きる。そして、オオヤケさが普遍的価値を持つ場合に最も滅私奉公的行動が生じやすい。なぜなら、自分個人の内なるオオヤケさも普遍的価値を持つことになり、滅私の行動に疑問を抱かせないからである。とすると、オオヤケが主張する価値が普遍的かどうかが肝心となるが、もし、明治体制のごとくにオオヤケの拡大が外的な規範で強く強制されると滅私の行動もまた規範化されやすくなる。が一方、オオヤケの価値が揺らいでいる時には共変性のゆえにワタクシさも揺らぐことが起きる。このような共変的な逆比例関係に比して中国における公私兼顧は日本同様、「オオヤケとワタクシは日本同様に個人領域を二分する」が、これはオオヤケが拡大（縮小）した時にはワタクシも拡大（縮小）するとする共変的正比例関係を前提する考え方であり、これはある個人を中心として同心円を描く中華思想であり、その中心たる個人による人治が天命に背く時には、それを代えるとする易姓革命の考えが生じる。が、この考えも個人領域をオオヤケとワタクシに二分するがゆえに、西欧思想における個人はオオヤケとワタクシには分割できないとする考えとは異なる。individual（個人）とは不可分性を示す。ここからprivate（私的、秘密）尊重の発想が生れ、そして、公表・社会を意味するpublicが生れる。これは個人の最も核心領域に不可分であるワタクシ＝privateがあるとする考えであり、ここからpublicを「東洋的に個人内に見出だすのではなく個人の外に作りだすもの」、オオヤケとワタクシを独立とする発想がうまれる。私がここで述べたいのは、日本人はこうだ、ということではなく、例えばここで述べたようにオオヤケとワタクシの関係のありようは様々であり、神戸が異国情緒を主張するなら、この多様性を受容することが肝腎ということである。なぜなら、そうしてこそ始めて個性を尊重できる、ヨコ型のコミュニケーション・ネットを形成するマチとなり得るからである。そして、それが神戸のヒトづくりに期待されているといって

よいからである。

＊ヒトづくり…複式簿記的構え

異質的個性の重視が肝腎である。が、もし異質性のみしかないとすれば我々は他者と交流できない。なぜなら交流はなんらかの基盤、手段の共有性に支えられているからである。ここから個々の多様性を活かすことの出来る共通の仕組みが必要となるが、その一つのヒントが「商い」にある。神戸は古くからの貿易のマチであり、鈴木商店などによって新たな「商い」が提起され、神戸商大、神戸商船大、神戸大学経済学部・経営学部の名前を見ても、明らかに「商い」に注目してきた歴史を持つ。さて現代の「商い」を支える仕組みは複式簿記であるが、いうまでもなく、複式簿記は小遣い帳、予算消化中心の単式簿記とは異なり、取引の双方がお互いに利益を増加させることを前提とした会計システムである。この複式簿記的構えを持つことが、今被災地で重要なのではないかと考える。

そこで震災において被災者が感じた心理をもとに、この複式簿記的構えを説明する（藤田正 1996 私論・被災者の心理　参照)。地震は様々な喪失（ヒト、モノ、カネなど）をもたらし、被災者は深い「絶望感」にさいなまれ、気力を低下させた。が、他ならぬ自分の命があったことに喜びと申し訳なさを感じ、残されたわずかなもの、さらには心暖かい支援によって獲得しえたものに感謝の気持を持ち、生きていこうとする力が喚起された。この力を「被災への抵抗力」とおくと、この「被災への抵抗力」から「絶望感」を引いた結果が現実に可能な「被災に立ち向かい得る行動量」となる。つまり、

A）「被災への抵抗力」－「絶望感」＝「被災に立ち向かい得る行動量」

である。いうまでもなく、被災者の被災後の「被災に立ち向かい得る行動量」は当初マイナスであった。が、「たくさん持ってても仕方がない、人生こんなもの」の如くに「絶望感」を低下させ、さらに「これさえあれば」「ありがたい支援」のごとくに残ったもの・新たに獲得したものへの評価を高めることによって「被災に立ち向かい得る行動量」をプラスに転じた。そして、実際に被災に立向かった。これを「被災に立ち向う行動量」と置く。「被災に立ち向か

い得る行動量」と「被災に立ち向う行動量」は異なり、前者は可能量、後者は現実化された量である。つまり、この「被災に立ち向かい得る行動量」と「被災に立ち向う行動量」の間には意思決定的選択行為があり、ここでは自らの行動をマネジメントすることが起こる。では、この選択行為の基準は何か。それは間違いなく「自らの現状をより変化させる」ということである。これを「自らの変化量」と置くと、

B－1)「被災に立ち向う行動量」－「自らの変化量」＝「効力感」

が成立する。この式の結果である「効力感」とは「ヤッタ！」の気持ちである。

そして、この「効力感」がA式の「被災への抵抗力」を高め、いわゆる自力復興を支える力となる。が、今回の地震の被害は甚大で自力だけでは復興できない。どうしても他者からの支援・他者との協力が必要である。ここから他力への期待が生じるが、それのみに依存することを被災者は望んでいない。自らが出来ることは自らが行いたいと強く思っている。ここから「自らと他者の間の応報性」が浮かび上がってくる。例えば、被災したおばあさんがボランティアの若者に言った「ありがとう、勉強しいや」の短い言葉にも、この「応報性」が含まれている。このことが起こる理由は他者への貢献が我々の効力感を最も高めるからであり、それは被災者もボランティアも同じだからである。こう考えて、B-1)を以下のB-2)に変更し、A)との関連を含めて以下に表示する。

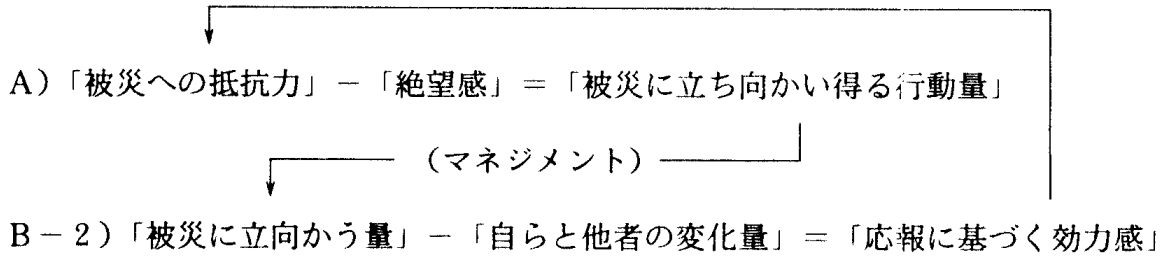


図4．被災における複式簿記的構え

B-1)とB-2)の違いが震災後に現れた。ある人はB-1)「自分たちだけでやるべき」と主張した。が、それは不可能だった。そこで求められたのが応報性ある

交流だった。しかし、そのためには震災状況を継続的に知らせていくことが重要であり、同時にそこには被災地から非被災地への提案が含まれていなければならない。なぜなら、そうでなければ、非被災地の人は注目しないし感謝もしないし、さらに被災者も自らの経験が他人に貢献したという効力感を持てないからである。かかる応報性があって始めて被災地と非被災地の間に協力関係を作ることが出来る。つまり、このような複式簿記的構えで震災に対処していくことの出来る人を育てていくことが求められており、これが被災地、非被災地を問わず大切である。

＊ヒトづくり…「夢」の語り部

さて、B-2)が可能なのは、「防災という夢」が全ての人に共有化されている場合である。というのは存在論的には異質な人々（自由で平等な人々）が共有化を達成できるのは新たに創りあげる「夢」以外にはないからである。とはいえ「夢」はその時点での現実から離れた幻想であり、多様である。が、それ故にこそ数多ある「夢」をコミュニケーションを通して理解し、共有化を目指して選択することが出来る。そして、この共有化可能性が社会参加を支える。ある「夢」が共有化された目標となり、我々の行動を判断する基準となった時、それは価値観となるが、被災地・神戸が提起する夢は「防災」であり、その夢を実現するには「語り続けていくコト」がなされねばならない。というのは「夢」はうつろいやすく、語ることをやめれば直ぐに消え去ってしまうからである。が、ここで留意しなければならないのは「我々」という日本語に含まれる文化的用法である。「複数語・我々」は、「我＋我の単数語」に分解しうる。例えば「私」自身が「前の我なのか、後ろの我なのか」分らない。つまり、「我々」という言葉は個人間に同質性があることが前提されるコトによって作られている。この同質性文化、例えば無前提に「ヒトは誰でも同じだ」と考えると「語らなくても分るはずだ」となる。この考え方が日本においては強く働くが、震災後最も多く語られた「結局、経験しないと分らない」の言葉は、この同質性を否定した。被災者は非被災者とは異なる経験を確かにしたのである。そして、この異質性の実感があるからこそ「防災の夢」を共有化するために語

り続けなければならないのである。とはいえ、このことは被災者にとって言葉ほど簡単ではない。というのは「防災という夢」の根拠となる被災体験があまりに悲惨で言葉にならないほどであり、なによりも日本文化的には被災者も非被災者と同質の心情に戻りたいと願っているからである。

無理やりに語らせれば、それは精神的トラブルを引起こす。それ故に、「語ることの出来る人から語り始める」ことから始めていくことが大切である。が、このためには、「語りの継続性」を明確に理解し、その活動を支える役割をする機能が必要となる。この機能を果たす規範づくりが重要である。そして、一挙に酒が発酵しないのと同様、「防災という夢」も一挙には発酵しない。ゆっくりとゆっくりと焦らずに、震災復興の過程を見極めながら発酵を促進するのに必要な刺激を与えていくことが肝腎である。この意味で言えば、丁度、酒づくりにおける杜氏の機能を持つ人を養成していくことが重要である。が、同時に同じ神戸の被災者といっても、被災は様々である。ここから酒づくりでいえば、「様々な地酒を造る」という発想が浮かびあがってくる。神戸全体を単一の品質の酒にすることは必要ない。必要なのは「酒づくり…防災」という共有化された夢を持つこと、そして、地域ごと、仕事ごと、などの属性ごとの多くの地酒づくりを重視することであり、そこに生れる様々なアィデア・ノウハウを交換し、高め合うことが防災コミュニティの形成となる。このためには先に述べた現場・研究協力組織を機能させることである。

＊ヒトづくり…杜氏の機能

醸造において杜氏は重要な機能を果たす。現代において、その機能がコンピュターに置き換えられたとしても、そのプログラムを支えているのは長い杜氏の経験である。杜氏は微妙な米の品質の変化、温度変化、水質の違いなどを見事に勘案しつつ、目標とする品質の酒を醗酵させる。この意味で杜氏は豊かな職人性を持ってTRYし続けている人である。ここでいう職人性とはTRYを具体化(SUCCESS) する経験を持ち、目標に結びつける(EFFECT)ことが出来る知恵を発揮するプロフェッショナルな力を持つ人のことだが、震災において被災者は様々に「生きるコトのプロ」として、その力を発揮した。この意味

で杜氏としての機能を発揮できる潜在能力を持った人は多数いる。ここからこの人々の力を活かすコト、つまり「生きるためのノウハウの顕在化と共有化」が重要となるが、職人は概して無口であり、自らの経験を語りたがらない。被災者も似ている。が、杜氏の持つ「酒造りプロ」という自負心を見逃してはならない。つまり、自らの力を異なる場所でも活かしたいと願ってもいるのである。日本の職人はワタリ職人とトマリ職人に大きくは分類できるが、杜氏は高い流動性を持つワタリ職人であり、長い間、日本の生産技術はこのワタリ職人的特性によって支えられてきた。例えば「包丁一本、さらしに巻いて…」修行した職人によって様々なノウハウが高められ、広められてきたのである。付言すれば、明治時代以降の終身雇用制は、国家政策にもとづく「ワタリ職人のトマリ職人化」であり、そのためにトマリ職人を重視する「ムラ的共同体幻想」が強調されたと考えられるが、神戸は明らかに様々な人が集うマチである。「ワタリ職人が住まう所」である。これを交流のマチと言ってよいだろうが、この特性に注目することは彼等の力を顕在化することに役立つ。つまり、自らの経験が他所で活かせないかと問うことである。この問いが実はウチとソトを結びつける契機となる。そして、この問いに応えようとする時に始めて自らの持つ力を見直し、それを高める方策を考え始める。反対にこの問いがなければ、自らの持つ力を自覚することが弱く、自らの日常性に埋没することになる。このことは、杜氏同士のコミュニケーションの重要性、それを刺激する仕組み、マネジメントの重要さを示唆するが、現代のマチ問題は一筋縄ではいかない。例えば、三十年ほど前までは、マチはイナカの束縛から自由になり、ヒトリで生活できるコトを幻想し得た空間であった。しかし、イナカが崩壊し、このマチにおけるヒトリ性が固定化し、他者とのコミュニケーションは「お金」を媒介とせずには成立しなくなった。つまり、ヒトリでなければならない、お金のみが交換手段という心理的呪縛が起きてきている。ここから、現代のマチに住む人が自由を求める時はイナカに旅する。例えば東京生まれの「フーテンの寅さん」の旅先はイナカであり、決してマチではない。そして、人気の観光地の名称は「スペイン村」、「オランダ村」であり、決してマチの代名詞「…銀座」

は採用されない。このように現代のマチ人が求めているのはムラ的雰囲気であり、そこに醸しだされるムラの匂いなのである。とすると、神戸というマチがムラとしての魅力をいかに重層的に内包し、ソトに向かって表現できるか、という問題が提起されているということになるが、これは現代の都市が抱える基本的テーマであるが故に簡単に答えは出ない。しかし、杜氏に擬した神戸の人々への期待が非常に大きいことは十分に理解しておく必要がある。何故なら、ここで述べたような現代日本社会が抱える都市問題に否応なしに直面するという経験をしたからである。そして、その経験が新たな防災にかかわる技術を開発するのではないかと期待されているからである。

3）具体的提案

これまで述べてきたことを踏まえつつ、いくつかの企画を提案する。その際の基本的概念は「交流」である。「交流」は個性ある両者、つまり異質性を持つ人々が夢を共有化するコミュニケーション過程である。提案する企画内容の全体的位置は図5に示すように①異質性統合のマチ、②発信するマチ、③夢を実現するマチに三分されるが、これらは1）事実に基づいているか、2）社会的に正当と認められるか、3）被災者の内面を誠実に表現しているか、4）内容が理解できるか、といった妥当性が検討され、当事者によって了解されなければならない。それ故に以下にあげる提案は全てアィデアであり、上で述べた4つの基準に基づいて検討する行為を実現できる組織化のTRYがまずは求められるのだが、それが前述した［現場・研究協力組織］である。

〈神戸〉
③夢を実現するマチ

①異質性統合のマチ	②発信するマチ
①－1（空間）、世界の匂い	②－1　発進するマッチ
①－2（時間）、大震災も越える	②－2　神戸へのお誘い
①－3（行動）、感謝を表現する	②－3　神戸のモノに託す

図5．提案の全体的配置

①異質性統合のマチ。まず異質性統合だが、このためにはまず異質性の共存が「実践可能なコト」として整理されなければならない。そこで、統合すべき異質性には世界という空間次元と震災復興という時間次元があり、それらを統合するヒトの行動次元がある、と理解して述べる。

①－１（空間）…神戸は国際都市と主張する。このためには世界中の文化の匂いがあることが必要だが、例えば、料理・音楽・踊りを考えてみる。料理は比較的世界を網羅している。が、音楽・踊りについては数が少ない。例えば、音楽ではジャズ、踊りではサンバが著名だが、フラメンコ、ポリネシア、タイ舞踊、中国舞踊、朝鮮舞踊なども考えられるのだが、それを観賞できる機会は少い。そして、重要なことはこれらのイベントを常設することである。例えば、ホノルルのキングス・ビレッジではポリネシアン・ダンスが毎日・夕方行われている。一言でいえばイベントのある「飽きないマチ」が「商いのマチ」に繋がることを理解する必要がある。さらに重要なことは、神戸には日本文化を象徴する空間がほとんどないことである。つまり、どのように世界中の文化を統合するかの立脚点が不鮮明である。このような意味で、後に述べるが、神戸北部地域を活かすことが、神戸南部の港に代表される地域との対比において重要である。また、ごく大雑把に見ても、神戸の西はアジアとの交流の歴史を持ち、中間は異人館に示されるように西欧との交流の歴史を持ち、東は酒造に示されるような日本国内での交流の歴史を持つ。それ故に、酒に注目すれば東から西にいくと、日本酒、ワイン、老酒が順番に楽しめるのだが、残念ながらかかる明確な視点がないために観光客は北野坂を登ってそれで終わりとなっている。神戸は広いのである。このことを意識した宣伝が必要である。

②－２（時間）…大震災という非日常性を乗り越えているコトの表現、「防災への祈り」の表現をある段階で考えるコトが必要である。例えば、各地区の防災福祉センターに「防災への祈り」をテーマとした彫刻・レリーフを設置し、震災・防災のコトが学習できるオリエンティングが可能なような工夫をする。そのために各防災福祉センターには震災復興に関わる地域ごとの取組み・アィデア、世界からの支援を示した資料を常備する。が、神戸は時間軸の歴史性を

表現することが比較的下手である。例えば、平清盛の福原遷都は公家社会から武士社会への重要な変化点にあるが、それを福原の地で実感することは出来ない。また「津の道」といわれる長田、兵庫あたりも、それを実感することはできない。それゆえに大震災にかかわるモニュメントは必要である。というのは、歴史性はマチの魅力づくりの一つのポイントだからである。

②－３（行動）。いうまでもなく、神戸に住む人、道行く人の表情などの行動はマチの魅力の決定要素である。震災時、世界中からの支援に神戸の人々は大きな感謝をした。が、「ありがとう」「御苦労さま」などの言葉が段々と消えている。何か、おしゃれな神戸らしい感謝のシグナル（例えば、ハワイのHANG LOOSE、手話のＫ）を作り、交流の手段とする試みを神戸から発信してみてはどうか。このような共有の行動をすることによって表情が和らぐという効果もあるからである。。

さて、ここで言いたいことは、①-1（空間）、①-2（時間）を組織化するのが①-3（行動）だということである。②-1（空間）、②-2（時間）は実践を意識すれば不可分といってよいほどの重層性を持って働きあっており、③-3（行動）による組織化には目標・価値実現を目指した戦略性がある。ややこしい言い方をしているが、端的な言い方をすれば、「組織化の提言」である。ただここで留意すべきは組織図に描かれるような組織は具体的に動いている組織化過程をある時点で切ったものだ、というコトである。つまり、マチは生きているのである。ところで、個々の組織化過程を担うヒトビトの集りは多数ある。故にこれらを統合する必要が生じるが、それはいわば、「実践的知の形成」によってなされる。ここでいう「実践的知」とはコミュニケーションを通して相互が高め合うことを実現し得る「知」のことであり、「現場・研究協力組織」がそれを担う機能を持つ。そして、それが「発信するマチ・神戸」の重要性に結び付く。

②発信するマチ

何事も発信するには発信すべきコンテントが必要だが、それが発信されたと受信者が分るためには、受信者が可視化しうるようにヒト・モノ・言葉・理念

・イメージ・象徴などを通して表明されねばならない。、

②-1、防災の提案。現時点で神戸が発信することを期待されているものの一つが、「防災の提案」である。この提案内容には、大きなコトから小さなコトまでたくさんあり、多様である。大きなコトについては行政が提案をまとめるとしても、個々の市民の工夫・提案があまり発信されているとは思えない。わずかに、風呂の汲み置き、観音開き扉を輪ゴムで止める、などがテレビ広報で流れているが、被災した人々はもっとたくさんの、言われてみて始めて「ナルホド」と言われる工夫をした。これらの工夫は小さいが、行政が広域の支援を本格的に開始するまでの期間、最低三日間を生き伸びる上では最も大切なことである。それゆえに、それらの工夫・提案を収集し、集約し、新たな提案とすることが極めて重要である。そこから神戸発の防災グッズを作り、提案していくことも可能となる。例えば、以下のようなものを思いつく。

（衣食住）

a．ビニール・シート…テントにすることが容易なような切れ込みを入れ、組み立て方を工夫する。

b．震災ジャケット…小型ラジオ、電池、懐中電灯、薬、ナイフ、笛、小銭、手帳、高カロリー食品、携帯電話など震災直後に必要なものが収納できるポケットがある。参考になるのは釣りジャケット、作業用ジャケットである。これは防寒具としても役立つが、現在の軽薄短小といわれる技術を活かせば可能であろう。

c．高カロリー食品…宇宙食ほど大層なものではなく、三日間ほどの行動を維持できるカロリーを持つ食品もしくは飲料。

そして、できるだけa，bは長田のケミカル技術、cは東灘のケーキ技術、醸造技術を活用する。そのために具体的な課題を提起し、技術開発の振興を図り、起業化への手助けとする。

（ライフライン）

d．ソーラー発電…震災後、神戸ではソーラー発電を備えた新築の家が増えたという。それをもっと促進する施策をとる。

e．貯水槽の設置…以前は町角に防火槽があった。これを置くことは困難だが、従来の防火槽の水は雨であり、屋根、雨どい、を通って溜められた。これを活かすコトを考える。例えば、雨どいをもう一回り太くしてもう一周家の回りに巡らし、蛇口をつけて必要な時に取水できるようにする。沖縄では各家の屋根に雨水貯水槽がある。開発されている浄水器を取り付けると飲料水になる。

f．小型耐火カマド…もっとも遅くまで復旧がかかるのがガスである。が、小型ガスボンベの熱容量は小さく、直ぐに売りきれる。そこで、ごく少量の新聞紙、木材で効率的に火力をあげることができるカマドで、それを組合わせるとストーブにもなるものがあるといい。

これらの開発には各種生産業者との協力が必要であるが、基本的には住宅関連会社に対して提案する。

（生活道具）

g．トイレ乾燥剤…トイレの水を出来るだけ少なく使用する工夫（例えば、トイレ貯水槽にペットボトルを入れる）と同時に大便を出来る限り早く乾燥させる。トイレ処理においてもっとも嫌なのが匂いであるから、f、小型耐火カマドで生じた灰を活用する技術を開発する。

h．水運び…被災者が最も苦労したのは水の確保である。そこでポリタンクが重宝されたが、円筒型の水タンクは積み重ねが困難である。故に角型水タンクにし、日常的に使う手押しのキャリー・カートと規格を合せる。

i．連絡用ボード…被災した多くの家に安否、避難先、移転先を書いた紙が張られた。が、雨によって消え掛かったり、風によって落ちたりした。そこで、取付け易く、風雨に強いボードを作り、事前に分る連絡先は書いておく。これは身元不明者を少なくすることにも役立つ。出来れば耐火であることが望ましい。

これらには生活の知恵が色濃く反映されており、それをもう少し工夫すれば有効な防災グッズになるものが数多い。主としてケミカル産業との協力が必要である。

（日常生活で獲得しておきたい知識、技術）

j．食器汚れ…ラップの使用によって様々な容器が食器に代わり、食器を汚さない工夫となった。なるほどである。

k．ガラス破片掃除…粘着テープが効果的であった。これもなるほどである。

l．薬草の栽培…食用、薬になる植物についてはあまり注目されなかった。その理由は現代人がほとんどその知識を持たないためだが、小さな庭でも栽培が可能な薬草は数多い。

m．だんボール使用…だんボールは間仕切りボード、散乱した家財の整理箱などに使われた。が、だんボールをきちっと細工することは意外に難しい。貼り合せることが出来る接着力を持つ接着剤、カッターが必要だがワンセットにしておく。

n．パンク修理…自転車が非常に役立った。が、パンク修理セットは常備されていないし、修理技術もない。

o．新聞紙を防寒具として使用する…衣服の間に挟むと防寒具になる。

p．ゴミ袋を雨具として使用する…切り込みを入れれば雨具になる。

q．簡易浄水器…消し炭、砂、礫などを順番に入れた容器から出てくる水はゴミを取り去っており、十分に洗濯などには使用できる。

r．防塵マスク…通常のマスクにコーヒー・フィルターを挟み込む。

s．作業靴…普通の靴を作業靴に改変する工夫。

t．手袋…軍手をたびたび使えるようにする工夫。

u．乾電池…使用途中のものに新しい乾電池を加えると長持ちしない。

v．蒸しタオル…水を浸してアルミホイールに包み、火に入れる。

w．水なし歯磨・シャンプー…市販されている。

x．水なし風呂…水なしシャンプーの拡大版。

y．小型家具移動機…少しの隙間さえあれば、そこに差し込みことによって簡単に家具が移動できる。

z．小型万力・テコ…足踏み式。自動車修理に使用しているものを改善する。

ここにあげたものにはびっくりするようなものはなく、事前に学習し、用意

しておくと役立つ知恵、道具である。ゆえに、小中学生などの防災訓練として活かすことが可能である。つまり、教育という場に持ち込むことが十分に可能であるが、そこでアイデア、提案を求めることは創造性教育にもなる。学校のみならず婦人会などにも呼び掛ければ、それこそアイデア、提案は数多いものになる。が、このようにして集められたアイデア、提案の種類は様々である。そこで、義援物資の仕分けと同じ整理が必要となる。この機能もまた［現場・研究協力組織］に期待できる。そして、そこで用いられた整理基準は被災生活を反映しているから、そこから防災にかかわる産業への提案が可能となる。つまり、［現場・研究協力組織］において、いかなる整理基準がどのような産業に結び付くかを検討する。メーカー、教育産業などが考えられるが、ここでいいたいことは被災経験に基づく防災コンテントは防災グッズのみならず、教育産業としても成立する可能性を持つということである。

②－２．神戸へのお誘い

防災コンテントは「交流」させなければ他者には貢献しない。「交流」は言葉、モノなどの可視性を持つものによって起こるが、震災感覚は経験しないと理解不可能とし、かつこの感覚の共有が要ると考えるなら、震災感覚体験のための設備・施設が有効となる。例えば起震装置による震度体験がその一つだが、震災は「揺れ」だけでなく、（驚き）に始まり、（恐怖）（悲しみ）（孤独）感情などを引き起し、さらには多くの工夫、協力体制を整えなければ脱出できない非日常的な出来事である。これらの過程を模擬的に体験するには冗談半分に名付ければ「震災ワールド」とでも称する震災啓発ランドが要る。このような施設を作ることは最新技術を使えば不可能ではないだろう。しかし、被災者は「二度と同じ体験をしたくないし、他人にも体験して欲しくない」と思っている。故に、このような思いを十分に活かした、震災を乗り越えるための工夫・提案がなされた施設を作ることが肝心となる。このためにはまず防災コンテントが収集・整理し、その設備・施設での模擬体験を位置付けなければならない。もし、そうでなければ奇妙な体験をしたということにとどまってしまう。「交流」とは相互の体験を理解しあうことだが、ここでは被災地、被災者の理解を

求めるコトの工夫について考えてみる。

（言葉・映像によって）

a．神戸への来訪を勧誘する手紙…私たちが行った『神戸・勝手に宣伝連』の経験から言えば、神戸の現状についての関心は非常に高い。そこに非被災地の人々への提案が含まれていると一層関心が高まる。もし、年賀状・暑中見舞いなどに震災への思いを多くの人が書けば、マスコミュニケーションとは異なったルートでの関心を喚起できる。

b．パソコン・ネットの利用…神戸からの震災への提案を次々と書込む。

c．阪神・淡路大震災関連の資料・著書・ビデオなどの紹介…このためには埋もれている資料・著書・ビデオなどを発掘する必要がある。そして出来うるならその著作権を震災復興を目指す組織に委譲し、その売上げを義援金として活用する。

d．神戸での買物を勧める…『神戸・勝手に宣伝連』の経験によれば、非被災地の多くの人々は「神戸＝怖い」と思込み、神戸を訪れないことの理由としており、それを打破するには神戸の水先案内をすることが必要である。

e．非被災地で『被災を語る』…今年の防災記念日においても、被災体験と提案が非被災地で語られたケースは少ないように思える。『被災を語る』ことの出来る人をボランティアとして募集し、例えば来年の1/17に各地で語っていただく。事実、大阪の多くの学生が「テレビ映像の中に閉込められた阪神・淡路大震災」が、実際の被災者の姿・行動を知って始めて「現実的になった」という感想を述べている。

f．神戸市役所発の書類を入れる封筒にアピールを書く…例えば、大阪府の職員、ことにボランティアとして神戸を訪れた人は、神戸市からの書類の中から震災の現状を読みとろうとしている。つまり、潜在的関心は高く、それを顕在化させる一言は効果的である。

g．週一回ほど短時間の『神戸からの提案』をＮＨＫで流す。

h．週一回ほど短い『神戸からの提案』を全国紙に載せる。

i．各市町村の公報に『神戸からの提案』を載せる。

j．『神戸からの提案』、殊に生活の知恵的アイデアをまとめて出版し、震災復興を行っている組織に販売委託をし、その売上げを義援金として活用する。

k．神戸商品を宣伝する…神戸オリジナルの商品で非被災地で流通しているものは意外に少ない。そこで『地元の人だけが知っている商品…例えば長田のバラ・ソース』を発掘し、流通ルートに載せる。中元・歳暮などの商品リストに神戸コーナーを設けて掲載する。

（トマリ空間について）

l．各種イベントの企画…現在も多くのイベントがなされているが、これを継続する。

j．「トマリ空間」の設営…神戸を訪問した人が「立ち止まりたいと思う心理的空間」を用意すること。というのは、例えば成功したと言われるルミナリエにしても、大部分の人は通行人であり、店の中には客がいない。が、「買物は立止まって行う」。故に、神戸に魅き付けた後の「止まらせる」工夫が購買行動の新たな要因になる。すなわち、道路も単なる通行路ではなく「トマリ空間」なのである。そしてこの「トマリ空間」が来訪者との共同性を形成する。

k．行列効果…行列を意図的に作ることによる販促が最近よく行われているが、これはヒトの集りが作り出す共同幻想が魅力になることを利用したものである。そして、行列している人々はゆっくりとしか動かない。つまり、そこには「トマリ空間」が出来ている。

l．象徴…「トマリ空間」にはその空間の象徴がいる。シンボル・タワーがその典型だが、人々はそれを認知することによって、その場所に来たことを了解する。ところで、この象徴には、自然、人工物といったモノと人間の行動を通して表現されるコトがある。そしていかなる象徴性を採用するかが、場作りの基礎となる。故に、この点についての検討が必要である。この点について考えてみる。

m．移民出発地という象徴…神戸は繰返し述べたように人々が交流するミナトマチである。そして、神戸の港は南の方角に位置し、そのミナトマチでの交

流は人々の間だけでなく、ヒトと自然（海）の間でもなされる。この代表が移民であり、数多くの人が神戸から出港した。先年、日系ハワイ移民について調査した時、彼等は神戸を出身地と共に独特の思いを込めて語った。しかし、神戸に入ってきた外国人のことがより強調されており、外国に出た人々について知りうる場が神戸にはほとんどない。現在、丁度移民100年ほどになる。そこで、移民出発地という象徴性を表現することは二世、三世を神戸に勧誘することに役立つと考えるが、これは「交流には入りと出がある」という基本的な考えに基づく。

n．海と山の共存という象徴…神戸は六甲山と瀬戸内海にはさまれた東西に伸びる狭い土地である。今まではまず東西ライン、ついで港が位置する南が強調され手きた。つまり、「山のある北」が抜け落ちている。例えば、地下鉄で谷上駅に着いても、そこには「山が持つ独特の雰囲気はない」。山の典型的象徴は果実、放牧などだが、神戸の場合はブドウ・牛肉で、そのブランドは神戸ワインと神戸牛である。六甲牧場、フラワー・フルーツ・パーク、ワイン城などはこれらの建造物的象徴であろうが、残念ながら神戸以外の人々には、この象徴性は十分に浸透しているとはいえない。故に、ことに北区を中心として「山の象徴性」を構成し宣伝することが重要。そして、このことが海・港との対比を鮮明にし、神戸のイメージをよりダイナミックなものにする。

o．奥六甲…現在、六甲の北部は「裏六甲」と言われる。が、「奥六甲」の名称の方が相応しい。何故なら、「裏」の反対語は「表」だが、「奥」の反対語は「口・端」であり、「表」ではない。つまり、「奥」とは「表」と並存する独立性を示す言葉である。例えば、この「奥」と「表」の並存性を具体化したレイアウトが江戸城であり、京都・奈良・堺などに見られる町屋である。これらにおいては「表」と言われる公空間が南に、そして「奥」と称する別の公空間が北に位置し、それらを「中」と称する私空間がつなぐ船型のレイアウトになっている。ここでこの船型レイアウトを指摘するのは、このレイアウトは農家の定着性を象徴する田型レイアウトとは異なり、武士・商人な

どの持つ流動性を象徴すると考えられるからである。神戸は間違いなく、高い流動性を持つマチだから、このようなレイアウトを意識することが象徴性を高めるのに有効となる。

p．北の象徴性…さて、南部が海という自然を象徴するなら、北部は山という象徴性を持つ。そして、ごく一部の北向観音などを除いて我が国の神仏の大部分が南面することが示唆するように、北という方向には北極星信仰に基づく神聖さが象徴されている。神戸とは「神のイエ」を示す言葉だが、そこには海の神々だけでなく、山の神々も住まいしていると考えることが必要である。

q．山の祭り…神戸北部の祭りは殆ど知られていない。さらに先にあげた六甲牧場、フラワー・フルーツ・パーク、ワイン城などにおけるイベントのアピール度は非常に小さい。故に、「山の神」に関わる故事をひもとき整理し、出来うればイベント化することが望ましい。例えば、「ぶどう祭り」。そこでは一本づつのぶどうの木を訪れた人が持ち、秋にはそれを採果し、簡単な機具でそれを絞り、希望によってはそれを個人ブランドでワイン化する。つまり、世界で一本しかない自分だけのワインを作ることの出来る祭りである。そして、そこは「花と香りに包まれて、神戸ステーキを食べつつ神戸ワインが飲める場所」であり、神戸の山の自然に感謝する雰囲気が醸し出されている。

r．神戸の山の自然をシンボル化した一角…さらにいえばこの山の雰囲気を持つ場所が神戸中心街近くにあるとよい。なぜなら、札幌のススキノ（蟹）、博多の中州（魚）のごとき、「神戸ワイン飲みつつ神戸牛の牛どんが食べれる」所は神戸には現在ないからである。いうまでもないが、このことを強調することが、瀬戸内海、さらには中華街など外国料理との対比化をし、全体的に神戸の持つ発酵イメージを高める効果を持つ。

s．六甲山マラソン…六甲山を縦横に走るマラソン・イベント。30年ほど前までは六甲山はハイキングのメッカであった。が、現在そのイメージは低下している。その理由は六甲山そのものが神戸市街地のウチに入り、神戸市街地

内の公園となったからである。とすれば、ポート・アイランド・マラソンとの対比を考えて六甲山マラソンを企画することが面白い。

t．匠の住むまち…さて、山人も海人同様に高い技術を持って流動する。その具体例が杜氏であり、杜氏は北からやってくる。酒づくりの季節以外は杜氏は北の方角、つまり山に住む。すると、その場所のイメージは杜氏の高い技術性から連想すると「匠たちの住むまち」とでもいうことになる。ある酒造会社は「時の匠」というコピーを使用しているが、現時点では北区にそのイメージはない。そこで、「北の匠」たちが住まう場所として北区をイメージ化する。つまり、酒造、工芸、焼物などの伝統的技術を受継ぐ匠が住み、さらにはシリコン・バレーのごとき情報産業現代技術が生れる場所、で、有機科学、生命科学、バイオなどの研究所が集う場所などがその具体的イメージである。

u．「中」位置の再構造化…神戸の市街地は南北せいぜい10kmほどの狭い範囲で東西に伸びている。この東西の方角だけを強調すれば、神戸は通過点としての「中」に位置することしかなくなる。そこに通過者を「トメル」には南北の持つ方向性が意識化され、他にない魅力を表現しなければならない。このことが「海」に合せて「山」を強調した理由である。このことは神戸市街地が代表する「中」の位置の意味を再検討することを促す。将軍は江戸城の中奥と称される「中」の位置において統治を行い、商人はインフォーマルなネットワークを作る場である「奥座敷」で得た情報を「中」の場所で検討し、店という「表」に出すかどうかを決定する。つまり、意思決定がなされる場が「中」である。そして、神戸は「TRYのまち」である。故に「TRYし続ける」ことを神戸の「中」は意思決定しなければならない。このことへのソトからの期待は大きく、ことに震災後においてはなおさらである。いうまでもなく、「TRY」するには新しいアィデアが必要である。つまり、「神戸の中」ではアィデアが飛び交っていなければならないのである。

v．水平的人間関係のTRY…アィデアが飛交うには人間関係における水平性が必要である。その具体的表現は全ての人のアィデアが差別なく検討される

場があるということである。が、これは言葉ほど簡単ではない。そのための組織が必要であるが、これには一定の方式はなく、それこそ「TRY」していくしかない。つまり、組織化、社会化という現代日本が抱える問題の解決策に関わるアィデアが飛び交うのが「神戸の中」である。

（防災にTRYする）

w．体験交流…現代都市の社会化という問題は未解決である。けれども、少なくとも「TRY」性は促進できる。例えば、防災に関していえば、婦人会、老人会、子供会、企業など、これまで神戸独自の活動をしてきた組織がソトの人々と交流する機会を設定することである。つまり、自らの震災体験を他者のために活かすことを目的とした交流である。このためには、多くの活動情報が収集され、ソトの人々の特性に合せて紹介できるシステムが必要である。

x．防災相談…防災は神戸だけでなく全ての人の願いである。そしてプロに任せなければならない側面と個々人が注意しておかねばならない側面がある。この後者について非被災地に被災者が「語り部」として出向き、体験を活かした形でのアドバイスを行う。実はかかる他者への貢献が被災者の効力感を高めることに有効（情けは他者のためならず）であることを心理学は明らかにしている。このために、「語り部」の紹介を行うシステムが必要である。

y．防災教育…防災の知恵は伝承していかねばならない。そして、神戸は多くの防災の知恵を潜在的に持っている。が、その知恵は神戸だけではなく他の地域においても活かされることが必要である。かかる防災の知恵伝承という意味での教育は垂直型組織だけではなしえない。何故なら、組織の垂直性は人々の了解・委託という水平性を基盤にして始めて成立するからである。

z．防災運動…防災交流、防災相談が志向するのは神戸と非被災地の間における水平的レベルでの交流である。それ故に、これは防災運動という側面を持ち、それを行政が支援することが必要である。

一言で「交流」と言われるが、そう簡単ではない。多くのボランティアが神戸に来てくれた。それはそれまでの神戸が培い、投資してきた魅力があったか

らである。が、今回の震災でそれは失われたのである。それ故に、新たな応報性を作り出していくことが現在の神戸に求められているといってよいが、双方向的「交流」は応報性に基づいて行われることを理解しておくべきである。

②－3．神戸のモノに託す

「交流」はヒトだけでなく、モノを通しても行われる。阿部謹也(1991)はヨーロッパ中世において人間関係のあり方が贈与・互酬の関係から売買の関係へ、農村生活から都市生活へ、多神から唯一神へ変化し、公的原理も変貌した、とし、阿部謹也(1995)は、「商業こそ自由と平等の契機」であり、江戸時代になって始めて貨幣経済が展開したとする。が、震災において都市生活のあり様が問われた。ここでは鋭く様々な現代的課題が現れた。とはいえ、贈与・互酬の関係から変化した売買の関係が我々の現代生活を強く支配していることには疑いがない。売買の関係を通して我々はモノを移動させる。このモノに神戸の思いを付託することによって互酬的な「交流」の輪を広げることは出来ないだろうか。次のようなことを思付く。

a．神戸印の防災グッズ…震災経験を活かした防災グッズ。先にあげているので略。

b．震災メモリアル…震災経験を活かすコトの宣言。震災復興の祈りを示したものの設置。例えば、現在なお残っているクラックの入ったレンガを使った建物。活断層を新たに調査し、それを保存する。震災前の神戸を描いた絵、写真を世界中から集めて再度、神戸を思出して貰う。

c．防災キャンペーン・Tシャツ…震災復興の祈りを表現したおしゃれなTシャツ。

d．防災キャンペーン・テレカ、乗車券など…震災復興の祈りを表現した絵、コピーがある。例えば、子供達の絵を使ったものなどは楽しい。

e．防災の知恵・リーフレット…市民から集めた防災の知恵集。神戸の駅、観光地に置く。

f．防災の知恵・リーフレットを神戸商品に添附する…ワイン・ケーキ・酒・シューズなどの箱におしゃれで役立つ防災啓発リーフレットを添附する。ポ

タポタ焼きの「おばあちゃんの知恵」が参考になる。但し、このことを実現するにはメーカーの協力が必要。

この部分のアイデアは、先と重複するので略するが、言いたいポイントはモノに添附することで「交流」する範囲を広げるということである。神戸が「安心なまち」になることが他の地域の安心感を高めることにつながらなければならない。つまり、「神戸・安心」に加えて「神戸あるからこっちも安心」と思ってくれるようなマチである。というのは、ここで必要な「交流」こそが、神戸の特性であるマチ性を復活・復興させるからである。ここから幾つかのアィデアが提起される。

g．防災科学都市宣言…モノ・ヒトに関わる多くの防災研究を発酵させる都市の意味だが、これは援助の発信地であることの宣言でもある。故に、テーマ、年代、地域特性などの基準によって震災経験が整理され、例えば年代別推薦図書といった形で情報提供できるようになっていることが望ましい。

h．防災発明工夫オリンピック…手近なものをいかに防災に利用するかを競う。例えば、ビニール・シート、タオルなどを素材とする。ビニール・シートによる貯水装置、タオルの下着化工夫などが出てくるだろう。これらの衣・住だけでなく元気の出る防災ケーキなど食事に関するものが出てくることが望ましい。これは創造性発揮都市の宣言をすることでもある。

i．防災船の運行…港めぐりをしつつ、防災を考えることが出来る船を建造し、毎日定時に訓練イベントを行い、乗客の防災意識を高める。いうまでもなく、この船は新たな被災地での救援活動を行い、「神戸があるから安心」の意識を持たせる。そして、例えば、神戸商船大学に防災学科を設けて、船からの救援を行いうる人々を養成する。

j．リサイクル運動による義援物資・義援金の備蓄…今回の震災においてたくさんの支援を神戸は貰った。それに対するお返しを準備する。つまり、応報性を通して交流することを宣言することだが、現在、被災者に物資・お金の余裕はない。そこで空きカン収集などのリサイクル運動を起こし、そこで得られるお金を利用する。この中心を子供達とすれば、これは社会性を教育す

る大きな手掛りとなる。すなわち、応報性を理解させることである。

k．コミュニティづくり…震災前に行われていた地域活動（例、マチづくり協議会、婦人会、老人会）などを再評価する。震災において得た最大の教訓は「日頃やっていなければ震災時にも出来ない」ということである。そして、震災時において神戸に大きな混乱が起きなかったことが不思議とされたが、おおまかな日本人論だけではなく、具体的な婦人会ネットワークの機能など、見逃しがちなものを腰をすえて検討することによって大きな防災のヒントを得ることができる。

ここで言いたいのは「応報性を実現できる、自立した神戸」の実現である。このことを強調するのは神戸が対等な個人が住まうマチだからである。そして、このことの実現という課題には現代都市が抱える重要な問題が含まれている。例えば、マチの生活には金銭が不可欠であるが「一万円は誰が持っても一万円」である。つまり、我々は「お金の前に平等」という意味での平等性の中で生活している。が、「神の前の平等」「法の前の平等」と異なり、「お金の前の平等性」に関しては評価が分れる。すなわち、お金持ちになることをドリームとする人もいれば、「お金なんて」とそこに価値を見出ださない人もいる。この二つの見解を対立的にとらえるのではなく、統合的にとらえることが必要なのだが意外に難しい。例えば、「お金なんて」という人が購買・消費生活を行わないかと言えば、そうではなく、むしろその充実を求めたりしている。「お金なんて」の考えが成立するには単式簿記的な収入源が必要である。現在、問題となっている高校生の援助交際と称する行為にも、このような単式簿記的構えがあり、いじめ問題にも常にお金の問題がつきまとう。こう考えると「お金」の意味を正確に理解することが肝心となるが、お金の問題は被災地において非常に重要な問題であるが故に、そのことについての複式簿記的考え方、構えを提起することが神戸に期待されているといってよい。さらに、お金以外の交流媒体についての複式簿記的考え方・発想の体系化の試みが求められており、それとお金に関する考えとの統合が求められている、といってよい。松下幸之助氏はどこかで「物流」に対比させて「信流」という言葉を提起していたが、

この「信流」の構築が課題といってよいだろう。が、「信」の構造は我々日本社会に住まう者が持つ考え方だけではない。多様な文化において様々な構造がある。このことを明確に意識しておかねば神戸が求めるべき「交流」は成立しない。この課題の解決は容易ではないが、活断層、地震動、建造物被害などを研究する自然科学とは違った、社会科学が担うべき課題であろう。

参考文献

＊阿部謹也(1991)　ヨーロッパ中世の宇宙観　講談社学術文庫
＊阿部謹也(1995)　「世間」とは何か　講談社現代新書
＊有賀喜左衛門(1967)　封建遺制と近代化　有賀喜左衛門著作集 4　未来社
＊ Bass, B. M.(1961)　Some aspects of attempted, successful, and effctive leadership. Journal of applied Psychology, 45, 120～122.
＊藤田正(1996)　別れ事例　阪神・淡路大震災　私論・被災者の心理　ナカニシヤ
＊神戸区復興委員会(1939)　神戸区水害復興誌　神戸区復興委員会
＊九鬼周造(1941)　情緒の系譜　岩波書店
＊中根千枝(1967)　タテ社会の人間関係　講談社現代新書
＊八木誠一(1988)　フロント構造の哲学　法蔵館